

早稲田大学 人間科学部 古文 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	国語 90 分（現代文 2 問、古文 1 問）
出典	『竹むきが記』 入試問題として頻出ではないが、本文前に詳しく説明が付けられているので見慣れぬ出典であっても戸惑うことはなかろう。

〔大問別講評〕

大問番号	設問番号	コメント	難易度
(三)	問十七	消去法が有効であった。イ「なる」は上接では決めきれないが、下接「物」と体言があることで伝聞推定と決まる。	標準～易
	問十八	A：ハと紛らわしいが、注に「使用人」とあることなどを参考にすればよい。C・「そらね」、F・「や」の疑問、「世」といづれも標準レベルの知識で解ける。	標準
	問十九		やや難
	問二十	「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「夜が明けてしまったならば不都合だ」の意味。	標準
	問二十一	本文中の「卯月」にひっかからないこと。空欄Eの後、「～めく」は「～ではないが、～のようになる」の意味。（現代でも二月頃に春めいてきた、などと使う）。前行「萩」「露」から「秋」と決まる。	標準
	問二十二		やや難
	問二十三		標準～易

〔総合コメント〕

難易度	やや難
形式・分量	分量に大きな変化はなし。例年出題されていた漢文の小問が出題されなかった。
対策	単語と助動詞を中心とした文法力をつけ、現代語に訳す練習をしておくだけではダメ。当時の社会、恋愛の形（和歌中の「きぬぎぬ」の意味するところ）など、古典の世界にどれだけ多く触れていたかが問われている。古典常識等の参考書の暗記も無駄ではないが、教師・講師の語る古典余話に日頃から耳を傾けていた受験生には大意も取りやすかったであろう。

